

共に生きる社会を目指す ～「浦河べてるの家」の 実践を通して

著者	向谷地 生良
雑誌名	ルーテル学院研究紀要
号	53
ページ	1-8
発行年	2020-03-01
URL	http://doi.org/10.34479/00000344



共に生きる社会を目指す ～「浦河べてるの家」の実践を通して

向 谷 地 生 良*

本稿は2019年11月30日にルーテル学院大学チャペルにて開催された学校法人ルーテル学院創立110周年&三鷹移転50年記念講演会を収録したものである。

ただ今ご紹介にあずかりました、北海道の浦河から来た向谷地です。このスライドにあるように太平洋岸沿いの小さな町からやって来ました。このたびは、ルーテル学院大学110年という記念すべきこの場に、こうしてお招きいただきまして、本当に身の引き締まる思いというんですか、不思議なご縁を感じるわけです。

私事になりますけれども、先日、都内で「毎日出版文化賞」の受賞がありまして、授賞式に行っていました。実は医学書院から2000年にはじまり現在まで続いている『シリーズケアをひろく』という企画があって、もう第35冊を数えて、読まれた方もいらっしゃるんじゃないかと思えます。このシリーズの中で、2002年の『べてるの家の“非”援助論』 - Amazon でベスト8位ま

で一時的だった本、2005年の『べてるの家の当事者研究』、2009年の『技法以前』と、べてるは3冊を出しているんですが、この息の長い企画に対して、このたび企画部門で受賞に至り、数多くの著者を代表して賞をいただきました。

「変革は、弱いところ、小さいところ、遠いところから」(清水義晴)という言葉がありますが、北海道の片隅で、海沿いの本当に小さな町で、本当に精神科病棟で青春時代を過ごした若者たち、いわゆる統合失調症ですとか依存症などの「苦悩の最大化した状態」とも説明される精神疾患を抱え、一番身も心も厳しい人生体験をした若者たちからはじまったべてるの“順調に失敗だらけ”の物語は、「当事者研究」を生み出すなど、さまざまな領域に新しい人を活かし励ます文化を発信し続けてきました。それは、北海道小樽の生んだ作家、伊藤整の言葉を借りるならば、「花と緑の洪水になって、それに押しつぶされるものを探そうとでもするかのように、青春時代というのは戸惑いに満ちたもの」と言われる人生の嵐の時期に多くの人は道に迷い、心を病むわけですが、そういう人たちが鉄格子の向こう側に追いやられ、そして生涯出てこれない。この中で人生を送ることを余儀なくされている人たちが何十万人もいる

* Mukaiyachi, Ikuyoshi
社会福祉法人浦河べてるの家理事
北海道医療大学看護福祉学部教授

という、この日本の現実。世界中の精神科病棟のおよそ2割を保有し、そして5倍から10倍の投薬量と、5倍から10倍の入院期間を、経済力を使ってずっと維持し続ける、他の世界では決して真似のできない異常な状況の犠牲者でもあった人たち、過疎地である浦河は、まさにその象徴のようなもので、この世界一の精神病者収容大国日本、そして今でも若者の自殺率が世界一、将来に希望のないと答える希望のなさも世界一、しかし不思議なことに現在の生活に満足してる人の割合も世界一という、このねじれた現実の象徴が、まさにこの精神科病棟だというふうにいえると思います。

この精神科病棟に、私は40年前（1978年）にソーシャルワーカーとして鉄格子の向こう側にオフィスを得て仕事をはじめたわけですが、ここで1人の若者と出会うわけです。今一緒にべてるの理事をしている早坂潔さんです。同い年で、同い年でありながら、一方の私は白衣を着てソーシャルワーカーとして、病棟にいて、皆さんの相談、ソーシャルワーカーとして相談に扱っている。一方で潔さんは、精神科で入退院を繰り返している。この格差に、きっと彼はどこか苛立ってたんだと思うんですけども、会うなり彼は「お、向谷地！」って、上から目線で、片意地を張った言い方で私に向き合ってきたんですね。だけど内心、ものすごい自信のないことが、伝わってくる。そんな彼が、たまたま同じ病棟で入院していた若い女性に、「教会行かない？」って誘われて、「何だ？ その教会っていうのは」ってということで、浦河教会に顔を出すようになったわけです。

実は私の家も中学2年の時までは天理教で、家には神棚があったんです。ある日突然、その天理教の神棚が外されまして、キリスト教になったんですね。母親が尊敬していた兄さんがカトリックのクリスチャンで、ずっと教会に憧れていた。何を思ったのか突然、中2のときに私は母親に連れて行かれて、教会というのに出会ったわけです。ちょうど私も中学1年の頃から、これ今でも不思議なんですけれども、とにかく担任の先生とうま

くいかなくて、なかなかコミュニケーション取れない。しかも私はクラス委員長をやっていたんですけども、最終的にはクラス会の議事運営がうまくいかないということで、先生にクラス全員の前に引き出されて、ほぼサンドバックのように殴られるという出来事があったんです。それまでも先生にはよく殴られていたんですが、それと体育の授業中の事故も重なって、学校にしばらく行っていない時期とも重なりまして、母親の誘いは、何か私にとっても、何か導かれているかのような感じがあります。

そんな中で教会につながっていった私だったわけですけども、「人のできない苦勞をしたい」というユニークなビジョンを描いてはじめて学生時代に、途中から教会に行けなくなってたんですね。理由は、あまりにも充実して、満たされて、その居心地の良さに耐えられなくなったんですね。それというのも、大学に入ったら「精一杯の苦勞をしたい」と考えて、「どうやったら苦勞ができるか」を模索した時に、思いついたのが「仕送りを断る」ということだったんです。そして、牧師の紹介で、特養の夜間介護人の仕事を得て、住み込みで働きながら大学に通うという暮らしを選んだわけです。そこで出会ったのが「寝たきり老人」と言われている人たちでした。その人たちに私は将来の自分を感じました。と言うのも、私が生まれた1955年は、日本の高度成長のはじまりであり、大学を卒業した年が終わりと言われていましたが、私の身体には高度成長神話が染みついていていたわけです。当時、19歳の私に突き付けられたのは「人は死ぬ」という当たり前の現実でした。そして、日中にはじめてボランティアで出会った筋ジストロフィーの子供たちや難病をかかえる人たちとの出会いも、当然のように死と言う別れを私にもたらしめました。ですから、教会生活の充実感は、私にとっては、「死」を日常として生きる人たちの現実からの“逃亡”のように思えたんですね。これはまずい、自分には安息よりも、危機が必要だと、自分には苦勞が必要だと考えて、私は突然教会に行くのをやめて、日曜日は

筋ジスの青年の介護のボランティア活動をして、一緒に競馬場へ行くという道を選んでったわけですね。4年生になると、みんなが公務員試験を受ける、何か自分にとって有利な条件を探しだして就職先を探すというところが腑に落ちなくて、就職活動からも遠ざかっていた12月の事でした。一番人気がなくて、誰も見向きもしないで、「希望者なし」ということで、一度外された浦河の病院からの「精神科ソーシャルワーカー募集」の求人が、病院からの熱心な依頼で、再び掲示されたんです。そうしたら、ただ一人、就職活動も何にもせず、12月になっても行き先も決まらない私に大学から電話がかかってきて「見学のつもりで、行くだけ行って見ないか」と言われて、足を運んだのが浦河だったわけです。決定打は、町のあまりの寂れようでした。就職先としての不人気さと駅前のみすぼらしい風景がへそ曲がりな私に、浦河での暮らしを決断させました。そこには、大学で学んだ「セツルメント」の活動があります。19世紀の半ば、産業革命の時代にロンドンのイーストエンドに広がったスラム街に飛び込んだセツラー（移住者）と呼ばれた若者たちにイメージを重ねていました。セツルの時代のように、寝食を共にし、苦労をともにしながら一緒に立ち上げる、それこそが福祉の原点だって考えて、この統合失調症や依存症をかかえるメンバーさんたちと、後にべてるの家となる古い教会堂に住み込みをするという「社会実験」をはじめたわけです。結論を言うならば、究極の、怒る体験、腹立たしさ、見通しのない不安、恐怖にさいなまれる経験をすることができました。その経験を通じて、家族への共感、そのような現実を生きざるを得ない当事者への尊敬の思いを得ることができました。

これこそ福祉の原点だと、熱い思いを持ちながら仕事をしていたときに、そんな中から、潔さんたちと起業を思いが芽生えてきて、べてるを1984年の4月に「浦河べてるの家」（以下、べてる）を立ち上げました。そして、日高昆布の産直と言う起業の担い手として与えられたのが、一

番、仕事が長続きしない、自分に自信の無い潔さんだったんです。常識的には、起業の担い手としては、もっとも“ふさわしくない”人材が、べてるの最初の働き手として与えられたのです。それは、イエスに与えられた12人の弟子たちが、エリートではなく、当時の人たちの常識から言って“もっとも情けない”若者たちであったことにも似ています。案の定、べてるの船出は、潔さんの“発作”との闘いでした。ちょっとした日常生活のつまずきが精神的な混乱と不安定を引き起こし、温厚な潔さんを暴力に走らせ、私たちを疲れさせました。そればかりではありません。べてるが立ち上がった1984年4月、この記念すべき時に、私は精神科の上司にあたる先生から「おまえと仕事はしたくない。僕が院長だったら首」と宣告され、病棟を追い出され、患者さんとの接触を禁止され、べてるの動きに共感をもって応援していた研修医であった川村敏明先生（現、浦河ひがし町診療所）も同時に“出禁”になってしまいました。

ですから私たちの歩みは、最初の10年は転落の一途だったんですね。しかもこの精神科病棟の住人になるということはどういうことかを、ちょっと想像していただければと思うんですけど、“こころの病”は不思議なんですね。一般的に病气っていうのは、人に同情されたり、心配されたり、人の思いが集まる。ところがこの病は、人の心が離れるわけですね。

ただ離れるわけじゃない、軽蔑ですとか、怒りですとか、対立という、病むことによって、さらに二重三重にスティグマを負っていかねければならない、大変な苦労を当事者や家族に強いるわけです。精神科病棟というこの鉄格子は、その象徴なわけです。

こんなことがありました。知り合いの牧師さんから、相談したいことがあると言われまして、話を伺う機会を持ちました。話は、ざっとこんな内容でした。「統合失調症だと思うんだけど、40代の女性の信徒さんに困っている。礼拝に来られるのはいいんだけど、その後ろに90歳を超える長

老さんがたまたま座っていた。そうしたら、突然その女性が、その長老さんに体を触られたっていうことを私に文句言ってきた」ということでした。牧師さんが言うには、「そんなこと絶対あり得ないし、周りにも人がいるし。どうしたらいいでしょうか。それでその長老さん、後ろに座らないほうがいいですよって言ったなら、今度は次の日、別な方が後ろに座ったら、今度はその方にまた触られたということ言ってきた。どうしたらいいでしょうか」

そんなことはべてるでは日常なものですから、私たちはこういうときこそ、一緒に研究するわけです。もし、私が近くに居たら「大変でしたね」といいながら「触られた感覚っていうのはどの辺でしょうか」といいながら、「実況検分」のように、じっくりとその方の言い分を聞きます。牧師さんの話では、その方は「お尻を触られた」と言ったそうです。

「それはないですよ。しかも礼拝中ですよ。90歳です」と牧師さんは訴えるわけです。私だったらこう尋ねます。「こういう苦労は、いつ頃からですか、今回が初めてですか」「恐らくきっと初めてじゃないと思います。こういう苦労にずっとさいなまれてきたと思います。それをずっと今まで耐えてこられたんですね。じゃあ今度は、私たちがあなたの周りを守りますので、それでも何かあったら、いつでも私たちに教えてくださいね」

私たちこうやって実験するわけですね。恐らく、そういう気心知れた人たちの間には、そういう現象は起きないんです。私たちはこの触られる感覚っていうのは、人の触れあいを求める身体の大切な分りにくいメッセージだと今までの研究の中から仮説を立てます。ですから、この方は何かつながりを求めている、きっと孤独なんじゃないかって考えるわけですね。でも「あなたは寂しいんじゃないの?」とは言わない。一緒に発見していくことが大切なわけですね。人の心や身体から発せられるメッセージは、社会、その人の生きる環境、生きてきた人生を取り込んだ内容、意味

を帯びています。人とのつながりを求める思いが、とてもわかりにくい形で、表現されると私たちは考えています。しかし、その結果、もっとも必要とされているつながりから断ち切られる真逆な現象として、私たちは出会わなければならない。私は『精神障害と教会』(いのちのこば社)という本の中に書きましたけど、聖書が示しているように、人を愛するという場面は、最も愛しにくい形で訪れる、私たちは問われるんだっていうことを、いつもいつも経験してきました。私はその牧師さんにそんな話をしました。それからしばらくして、牧師さんから電話をいただきました。「向谷地さんのおっしゃったことも役員会で説明し、協議しましたが、ちょっとしばらく休んでいただくことにしました」。私はつくづく思うんです。こういうことになると教会も極めて普通で、常識的なんです。

でも大丈夫です。順調です。私もそうだったからです。だからこのテーマは大変なんです。彼らと一緒に暮らして、病気も意味ある経験だっていうふうに口先では言いながら、一緒に暮らしてみても、メンバーさんにはがいがじめにされたり、彼らが自分の部屋が怖いといって、イヌを連れて私の部屋に2~3日籠城したときに、私は申し訳ないけどお巡りさんの力をやっぱり借りました。そして嫌がる彼を引きずるように「ごめんね」と謝りながら精神科病棟に連れて行き、入院させざるを得なかった時の敗北感。「言ってることとやることが違うじゃないか」という強烈なジレンマが、私の実践の原点です。ですから私は今もずっと彼らと寝食を共にしている、セツル的な感覚で今も仕事をしています。

先にお話ししたように社会的にスティグマの対象となりやすい人たちと身近に暮らしていると、私たちも一緒にそれに巻き込まれます。地域ばかりじゃなくて、私たちが一番頼らなければならないチーム、病院の中でさえ、排除される立場に立ち、私と、もう一人の精神科医の川村先生も出入り禁止になるという、そういう経験をしました。ところが私たちが違ったのは、にもかかわらず機

嫌が良かったことなんです。機嫌が良かった。私は病棟に出入り禁止になったとき、精神科の患者さんとの接触禁止になったとき、青天の霹靂なんですけども、心の中に不思議と深い感慨に包まれたんですね。「ついに来たぞ」みたいな。新たなチャレンジ課題というんですかね。まるで何か新しい冒険をするかのような感慨が湧き起こってきて、あ、そうか、こんな感じで人間は鬱になったり、心身症になったりするのかわ、出勤するとき体が動かなくなって、布団から上がれなくなるっていう経験がこれから自分にも起きるのかな、なったら自分はどうか対処するんだろう、というふうに、興味関心が高まっていきました。べてるのメンバー達が、経験した“こころの病”という境地に、少しでも近いところで、生きてみたいという感じがありました。

ところが、苦労と言うのは、“避けようとする”と追いかけてくるんですが、“迎え入れよう”とすると、残念ながら来ないんですよ。待つと、こないですね。来たらどうしよう、なったらどうしようって考えると「病気さんが助けに来る」です。面白いですね。

これを私たちは「病気の砂時計理論」と言っています。現実の苦労に、もう嫌だと苦労にうろたえていると、病気さんが見かねて勝手に助けに来るわけです。

そこで、学んだのは、人の相談にのる仕事をするためには、人に相談する経験が大事だということです。逆に「相談してみたらどうなるか」と思って、私はメンバーさんに相談する実験をしました。すると、効果はてき面でした。本当に助けられたという実感がありました。私は人の生きづらさを、階層的（苦労のピラミッド）に理解しています。病気は「苦痛」の段階なんですけど、回復は、それが普通の「苦労」になって、ちゃんと「苦悩」にたどり着くと、それが私たちは回復だっていうふうに思っているんです。つまり、病気が治って、生活が安定しても、なお、私たちの人生は生きにくいということです。その生きにくさから逃げないで、それ自体を大切な苦労として生

きていく、それがべてるの回復観であり、当事者研究が目指すものです。

私たちがこうして病を負った人たちと出会う中で、人間は、ものすごく残酷でもあるわけだし、心を病むって言うこのテーマを巡って、こんなに長い間人々がエネルギーを費やして、なおかつ、たどり着いたのが鉄格子って言う、この現実私にとってとても興味深い大きなテーマとして見えてきたわけですね。

今日、ぜひともお伝えしたいのは、私たちのこの北海道の中、過疎の町、北海道で一番貧しい地域の中で、しかもこれは東大の熊谷晋一郎先生（東京大学先端科学技術研究センター）の説明を借りるならば、置き去りにされてきた、さまざまなマイノリティの人たち、とりわけ、重複的な差別を経験してる人。例えばジェンダーの問題と、虐待の問題、薬物依存、これらを併せ持つ人たち、あるいは、エスニック・マイノリティの精神障害を持つ人たち、この多重スティグマと呼ぶような、重層的な差別や排除を背負ってきた人たちの中から生まれた取り組みが、「一緒に研究しよう」という当事者研究なわけです。私たちがどうにもならない状況の中で、人の相談に乗る仕事をしていたはずの自分が、当事者の皆さんに相談したときに得られた安心感、ずっと研究対象、支援対象、治療対象でもあった人たちが、自ら自分たちの中に起きてることを研究し始めて、まさに自己治療というべき回復のプロセスを自分事として研究しはじめた時に、とっても面白いことが起きたんですね。

顔面バッシングが止まらないで、十代の頃からずっと精神科病院に入退院繰り返してきた1人の女性が、浦河にやってきて間もなくの頃、車の中で、私たちの目の前で突然顔面をバッシングし始めました。顔面バッシングがおきるといつも救急外来を受診して静脈注射打ったり、入院することで対処してきた彼女と車中で、同乗していた3人のメンバーと即興で研究ミーティングをしたところ、何と彼女たちは、顔面を激しくバッシングしている1人の若い女性の前に、「私をた

たいて」とか、寒い、冬だったもんですから、頭にマフラーを巻こうとしたりとか、もうあだこうだ、その顔面バッティングしてる彼女を囲んで、キャッキョッ言いながら、これやってみよう、あれやってみようって、「アハハ、駄目だね、アハハ」ってやってたんですね。そしたら何と1人の女性が、顔面をバッティングしてる彼女の脇腹をコチョコチョコとくすぐったんですね。そうしたら、この鬼の形相で顔面バッティングしてる彼女が、身をよじって笑いはじめたんです。あ、これは脈あると、みんなでコチョコチョコ、彼女をもみくちゃにしてコチョコチョコやった。そしたら彼女は思いつき笑ったんです。そうしたら止まったんです。

今まで専門家が10年以上かけて、多額の費用と多額の日数をかけて、彼女を治療するためにカウンセリングをしたり、いろんな精神療法を施したり、絶え間なく注射を受けてきた彼女。そして入院中に『当事者研究』という本に出会って、家族が差し入れた研究に出会って、「あ、これ私もやってみたい」といって突然退院し、浦河に駆け込んできた彼女。その彼女を待ってたのは、専門的な精神療法でも特別なアプローチでもなく、同じ痛みを経験したメンバーさんたちの歓迎と、コチョコチョコだったんです。本当に止まったんです。私は目の前でその奇跡を見ました。ちょっとその場面を動画が残ってますんで、皆さんに紹介したいと思います。この動画は精神科の先生方に見せたことがあるんですけども、「精神医学の敗北だ」って言ってましたね。

【動画再生】

これは、わたしにとっても歴史的な瞬間で、重要な示唆を含んでいます。本当に私たちはこういう方たちを鉄格子の中に閉じ込めて、ある種の専門的な治療という名の下に、長い間現実社会の門を閉ざしてきた。そして五感が幻になるっていう不思議な体験の中で、どう生きればいいのか分からない、生きてきた人たち、そんな人たち。浦河では、朝起きたら「首が取れた」とか、笑顔が怒っている顔に見えたりとか、こんな不思議な経験を

した人たちが一緒に研究しようという、こういう分かち合いをすることによって、生きられるようになるという不思議な体験を私たちは重ねてきたわけです。

このような当事者研究に象徴される私たちの取り組みには、実はルーテル学院大学につながる方々との出会いが深く、関わっています。私が本当にこういう中で、手探りで何か現実をより生きるための大切な手掛かりを探していたときに、1990年、私がたまたま札幌で顔なじみの保健師さんとぼったり会ったんですね。「今日は何か」と伺うと「ルーテル学院大学の前田ケイ先生のSSTの講演会があるんですよ」と教えていただきました。そこではじめてSST (Social Skills Training: 生活技能訓練)を知って、前田先生の講演を立ち見で聴かせてもらいました。その場で「私たちが探していたのは、これだ」と思ったんです。従来の治療される治療するという考え方を超えて、一緒に考える、体験を重ねるといって、そういうアプローチが始まってたってことに、私はものすごい衝撃を受けて、「これだ」と思ったんです。それで早速、前田先生を浦河にお呼びまして学ぶことになったんです。

これは私たちが本当に大切な武器を手に入れたと思ったんです。このSSTっていうのは私たちの従来の、何が大切か、「共に」という、この在り方を裏付ける大切なツールになったんです。ですから、2001年に私たちがはじめた当事者研究と一緒に研究するという発想は、まさに前田先生との出会いがあったんですね。

それで私は出入り禁止になったときに、私は心に決めたことがあるんです。私を追い出した人たちの悪口、不平不満、非難は、絶対しないようにしようって心に決めました。これは私が善人だからじゃなくて、私は実験としてそれをやったんですね。5年たって何と一緒に追い出された川村先生が、なんと浦河にまた赴任してきたんです。奇跡みたいなもんですよ。

その川村先生が間に入って、「向谷地君、あんた追い出した上司の先生が、何かあんたに話があ

るって言ってるぞ」。それで忘年会のときに上司の先生、今まで廊下で会って「おはようございます」と言っても、全くあいさつもされずに通り過ぎてた先生と五年ぶりに話をすることができたんです。緊張しました、すごく。「先生、どうもお久しぶりです」って言ったら、先生は「君には負けたよ」って、握手をしてくれました。5年ぶりに、私はまた仕事に復帰することができたんですね。

そんなふうにして、私たちが少しずつ目を開かれたときに、道が開かれたときに、私はスタッフを1人増員する必要があったんです。そこで前田先生に、「先生、どなたかいませんか」。紹介されたのは、ルーテルの卒業生でアメリカの留学から戻って間もない伊藤恵里子さんでした。この伊藤恵里子さんが浦河に来てくれたおかげで、子ども支援、家族支援が浦河で始まったんです。

浦河は今、応援によっていうことで、障害を持つ子ども、いろんな事情で困難を抱えた親たち、でも授かった子どもは大切な子どもとして、みんなで応援して育てていこうという、そういう応援ミーティングが注目されています。一番、熱心なのが、東大の教育学部の先生たちです。しょっちゅう浦河にリサーチに来ています。その種をまいてくれたのが、ルーテルを卒業して、すぐ母子生活支援施設に行って経験を積み、アメリカでまたさらに研鑽を積んだ恵里子さんで、前田先生を通して浦河にやって来てくれたことからはじまりました。

ついでに言うと、伊藤恵里子さんに出会って、うちの子どもたちが新潟の敬和学園という高校のことを知り「いいよー、あの高校は！」と言われたことがきっかけとなり次々に敬和に行くことになりました。そのときにうちの娘が言った言葉が忘れられません。「お父さん、いろんな高校を選ぶとき、何を基準に高校を選んだらいいのかな」って、長女が聞いてきました。「そうだな」って言うだけなのに、うちの娘は「あ、分かった。どっち行ったら苦勞ができるかでしょ！ 新潟行ったら苦勞できるかもしれない」っていうこと

で、敬和学園を選びました。

そしてあの精神科医の川村先生の娘さん、直子さん。非常に高校では優秀な成績で、何とソーシャルワーカーを目指したいって、恐らく伊藤恵里子さんを見てたんじゃないかと思いますが、大学を選ぶ時にも伊藤さんが卒業された大学で、前田先生のもとで学びたいと考えてルーテル学院大学に進学され、卒業後は、病院のソーシャルワーカーとして活躍されたんですね。そのボランティア活動で出会った彼氏さんが、何と毎日新聞の記者をやっている、今回の毎日出版文化賞ですから、不思議な出会い縁を感じます。

数日前 NHK の「視点論点」で、東京大学の熊谷晋一郎先生が「当事者研究から見える社会」という解説をしました。2015年、何とこの浦河から立ち上がった、いつでも困ったときは自分たちで研究しようという、お茶の間から研究という。研究者が研究するんじゃない、お茶の間から、誰もが研究という1つの情報発信をはじめよう、困った親子関係でも、友達関係でも、学校でも、何か困ったとき「さあ、みんなで一緒に研究しよう」という、そういう草の根的な研究というこの発想が、今の時代を変える大切なキーワードとして、何と2015年に東京大学は、新しい学問領域として当事者研究を立ち上げたわけです。

今、東大の当事者研究のラボは、学際的な研究拠点として大きな広がりを持っています。そして今、全国各地に「研究」という1つのネットワークが広がりつつあります。さながら大学の私の部屋は学生相談室のように、学部や学科を超えて、さまざまな苦勞人が集まる学生相談室みたいになります。私の部屋は、まさに研究所です。いろんな学生たちがいろんな話題を持ち込んで。ちょっと何かあると、「あ、じゃあ研究しよう」。ホワイトボードに親子を含めた人間関係とか、お金の使い方、そういうことに苦勞してる学生たちがみんな集まってきて、「じゃあお金の研究しよう」、何でも研究しちゃうんですね。

こんなふうに関係ない失敗や行き詰まりの経験を持った人たちが、その経験を持ち寄って、その

現実の中から新しい可能性を生み出していこう。それがこんな波及効果を生んでいます。例えば、弱いロボットを造ろうと。人が助けなければいけない情けないロボットを造るというアイデアが生まれています。普通ロボットっていうと、人間のできないことを全部やってくれる万能なイメージで、いかに人間を超えて、完璧なものを造るかっていうのが、ロボットに対する期待としてありますが、逆に「弱いロボットを造ろう」。いわゆる助け合わなければ生きていけない要素を、ロボットに持ってもらう。これを、弱いロボットを学校に持ち込むと、もう子どもたちがキャーキャー言ってロボットを助けはじめる。不思議な現象が起きています。

そしてビジネスの領域でも、まさにこの弱さが1つの時代のキーワードとして、今、特に起業の組織論とか経営論の中でも議論されはじめています。まさに変革は、弱いところ、小さいところ、遠いところから、まさに人間は助け合わなければ生きていけない存在である。共に仲間になること、語ること、弱くなること、研究すること、この営みを私たちの身近なところから、私たちの今ここから起こしていくことによって、私たちは誰しもが助け合わなければならない共にある在り方を、手に入れることができるのではないかというふうに思っています。

私は統合失調症を持つという経験を余儀なくされた人たちが、実は私たちに対話の泉に戻ろうというふうに呼び掛けている、大切な隣人であるような気がしてなりません。対話、まさにここに私たちの未来の可能性があるのではないか。実は毎日新聞のこの授賞式、選考委員長が、哲学者の鷲田清一先生でした。しばらくぶりに先生にお会いしたんですけども、その先生は授賞式終わった後、「先生、どちらに行かれるんですか」「これから仙台なんです」って言うんです。「そういえば先生、せんだいメディアテークの館長をやっておられましたね」。

そのメディアテークには、このような鷲田先生の「対話の可能性」というメッセージが掲げられ

ています。「対話は他人と同じ考え、同じ気持ちになるために試みられるのではない。分かり得ない、分かり合えない、伝わらないというこのもどかしさ、それを分かり合えない、伝わらないという、このお互いのもどかしさをお互いに開いたときに、私たちは共に助け合える、そこに対話が始まるのだ」とおっしゃっています。統合失調症とか、こういう心の病というものの経験には、もしかしたら私たちを私たちたらしめる大切な可能性を持った人たちとして、私たちは尊重しなければならない。またそういう経験をした人たちに、学ぶことを私たちはしていかなければならないというふうに思っています。

最後に、私たちは、バングラデシュのNGOの活動をしている、キリスト教海外医療協力会の方たちとつながっています。このバングラデシュには、家で座敷牢につながれている精神障害者の方たちがたくさんいるということで、私も訪ねてきました。

そしてその鎖につながれたり、牢屋のような部屋で裸で暮らしている人たち、そしてこの方たちも統合失調症なんですけど、こうして本当にごみの中にまみれて路上で暮らしているこの方たちのことを思って、今、浦河にしながら、アジア、アフリカで多くの統合失調症や精神疾患を持った人たちが、このような現実で暮らし、しかもほとんど話題にもならないってこの現実を、少しでも私たちは多くの皆さんに伝えながら、この現実の担い手になりたいと思って活動をしているところです。

まだまだ道半ばですけれども、この中でまさに、だからこそ、一緒に皆さんと研究を続けたいというふうに思っています。ご清聴ありがとうございました。